

SV-19D 更なる魅力

1. 初段管の差換え

組立て当初は初段管：JJ ECC83S，出力管：GD350Bを使用していました。JJの型番の末尾のSはスパイラルヒータを示す記号で、スパイラル化によって低雑音化が図られています。多分にアンプ本体の基本設計に負うところが大きいとは思いますが、雑音は全く気にならず、倍音豊かにGD350Bをドライブし、深みと余韻を感じさせてくれ、出力管の良さをうまく引き出してくれたようでした。決して不満を感じた訳では有りませんが暫く聴き込んでから、満を待して秘蔵のムラードECC83に交換しました。やはりムラードは別格のようです。地に足が着いたような安定感が出て、SN比という言葉では表せないような静寂感が感じられるようになりました。また、音の輪郭の滲み感も少なく（エッジを際立たせるのとは異なる表現）、音の粒子が細やかになりしっとりとした湿度感が感じられます。弦と指の摺れる音や管楽器のプレスやキー操作音、ピアノのハンマー打音なども非常に生々しく感じられ、特に無音からの音の立ち上がりや音が消え行く余韻感は文字や言葉ではうまく表現できませんが、実に素晴らしいです。

ムラードECC83は現在では希少品で、市場価格も高騰しているようです。また、機に恵まれなければ、産地、同一ロット品でペアを揃えるのは難しくなっているようです。ムラードやテレフンケンのようなビンテージ管は高価でなかなか手が出ませんが、運良く素性の明確な物が揃えられるようならば試して見ても良いのではないかと思います。

その後、現行品で価格も手頃なソブテックの12AX7LPSを試してみました。この電圧増幅管もスパイラルヒータが採用されており低雑音化が図られています。一聴した感じは、しっかりした骨格感のある表現でムラードやJJに比較して倍音はやや少ない感じですが、エッジ感のある切れの良い音が好みの方には合うような気がします。以前、エレキットのTU-879Rでテレフンケンの12AX7を試したことがあるのですが、その時感じたやや生硬い印象に近い様です。

出力管の差替えは本数も4本で価格も張るので、チョッと換えて見ようかという具合には行きませんが、現行品の電圧増幅管でも音の変化や出力管との組合せによる相性やニュアンスの違いを充分楽しむことができます。



これまでに試した初段管（左から JJ ECC83S, ソブテック 12AX7LPS, ムラード ECC83）

2 . 出力管の差替え (その 1 : ゴールドドラゴン K T 8 8 レトロ)



S V - 1 9 Dにおいて GD 3 5 0 Bは中庸を行くとの評価の通り、どんなソースもそつなく聴かせてくれる優等生の様です。また、3 . 5 極管と言わしめる理由が解るように、倍音豊かな上品な響きを堪能させてくれ、このアンプの機軸になる真空管であると言えます。

GD 3 5 0 Bで暫く楽しんだところで、いよいよKT 8 8を試してみることにしました。以前、TU - 8 7 9 Rで差替え用に使った手持ちのサンバレープライムKT 8 8ペア（曙光電子製選別品）と同等品のゴールドドラゴンKT 8 8レトロを1ペア買い足して試してみました。外観、内部構造は若干のマイナーチェンジが有る様ですが、同一特性が担保されているとのことです。（クウォッドでなくても簡単なバイアス調整で使用が可能です）

やはり大出力ビーム管だけあって音の立ち上がりはトルクフルな力感溢れるサウンドで、音像の密度感も高まった感じです。私は偶々、真空管アンプ暦が短いこともあり、これぞKT 8 8の音と言うアンプを聴き込んだことがないので違和感はありませんでしたが、KT 8 8の音を良く知っている方には良い意味で裏切られることになるかも知れません。大橋店主の言葉を借りれば、“KT 8 8の通常レベル以下の低電圧駆動をすることで新たな魅力を見出すことが出来た”と言うことに遭遇するでしょう。シャープでエッジを効かせ、力で押してくるのではなく、非常に中域が充実していて、ふっくらと鳴るという評価通りの印象を聴くことができます。と言っても緩いのではなく、音の立ち上がりは力強く、制動が良く効いており、低域も締まって筋肉質な厚みのある音を聴かせてくれます。ウッドベースなどでは実に弾力のある締まった低域表現で、オケもディティールが曖昧にならず雄大なスケール感を引き出してくれます。

推奨I pは4 0 m Aですが、同様に色々試した結果、最終的に5 %ほど下げた3 8 m A（後述のJ E N S E Nコンデンサーに交換前は3 4 m Aで使用）で落ち着きました。たとえば悪いかもしれませんが、I pを下げて行くと、きつく絞われた縄が緩んで太って毛羽

立って来るような感じで、 32mA 以下では急激に緩むような印象です。タイトでシャープというのも聴き疲れがしそうですし、緩過ぎるのも、とすることでKT88を装着したことを実感できるよう、トルクフルな音の立ち上がりとレスポンスをしっかりと感じられるIpとしました。やはりこのアンプの特徴である半固定バイアスは微調整することで好みの音を探ることが出来るので、非常に便利であることを再度、実感しました。

3. 出力管の差替え (その2: ロシア復刻版ムラードEL34)...JENSEN 換装後



復刻版とは言えオールムラードの外観 (外観バランスも良好です)

この出力管は店主日記で紹介されるや否や蒸発的に欠品となったものです。初回は買い逃したのですが、追加販売にて樽アンプ用にゲットしました。樽アンプ (初段GE:6SN7GTB) では音像の定位がしっかりしており、エッジを際立たせるという印象ではないのですが、音像の密度感、実体感が良く出ており、高域の伸びやかさと弾むような低域が非常に魅力的でした。倍音感と粒子の細やかさではフィリップスECG7581Aに一步譲る印象ですが、弾力とメリハリの効いたスッキリした音はこの球の持ち味だと感じました。これに気を良くしてSV-19Dではどうなるかな〜と、興味がふつふつと湧き上がったため、同一グレード品を追加購入し、クウォッドとして試してみることにしました。

SV-19Dにおける音調・特徴は“音の粒子はKT66より大きめだが元気よく明析、繊細感よりもパワー感で聴かせるソリッドな音。”とあったので倍音感の少ないクールな音かと多少心配しましたが全くの稀有に終わりました。解像度が高く力強い密度感の有る音で、倍音感も十分に有り、低能率の小口径フレンジSPも非常に力強くドライブしてくれます。

ジャンルも選ばず、Jazzでは高域の抜けに加え、ベース、バスドラも良く締まって、小気味良く弾み、ピアノやサクソも情感豊かに表現してくれます。クラシックでは弦楽器の艶やかさと伸びが秀逸、チェンバロの爪弾く感じやピアノの響きも美しく、力強いドライブ力と相まって、オケのスケール感も十分に表現してくれます。(Ip = 40mA に設定) 後述のJENSENコンデンサーやムラード初段管の相乗効果もあるとは思いますが、SV-19Dと復刻版ムラードEL34の組合せは大変素晴らしく、この組合せで継続使用中です。(販権の問題もあるようですが、キット屋サイトにおいて定番品取り扱いが望まれます。)

4. カップリングコンデンサー換装

CR結合の真空管アンプではカップリングコンデンサー交換によるグレードアップ改造は常套手段となっています。本機のデフォルトのコンデンサーはDEL RITMOのオイルペーパーコンデンサーが採用されており、それだけでも十分な高音質が実現されています。キット屋のWEBショップでも東一のビタミンQやJENSENのオイルペーパーコンデンサーが取り扱われています。特にJENSENのコンデンサーによるグレードアップは店主日記などにも紹介されており、以前から非常に気になっていました。JENSENオイルコンの単価はビタミンQよりも高く、プッシュプル機のため4個必要とあってチョットした出費となりましたが、買い求めて試してみることにしました。

換装による音質改善効果は想像以上（効果を明確に認識できるか半信半疑だった）で、価格を遥かに超えた効果が得られたと思います。エージングには最低数十時間程度は必要とのことですが、音の滑らかさと透明感のある瑞々しは交換直後からその差を感じることができます。エージングが進むにつれ、更に滑らかさとしっとりとした湿度感が増し、その音触はまるで1クラスも2クラスもランクアップした上級機を聴いているような変化と言っても過言ではないと思います。少し高価な部品だけに、たかがオイルコンに資するのはとためらう向きもあるかとは思いますが、JENSENの効果凄いです！



デフォルトDEL RITMO



JENSEN 錫箔オイルコン



JENSEN コンデンサー換装後の内部配線全景

S V - 1 9 Dは初段管や出力管の差し替え , I p 調整などによる違いを確認しながら、より自分の好みに合う音にチューニングすることが出来るアンプ、言換えれば組立ててから自分で育てるアンプであると言えそうです！

- 以上 -